

## 創造都市は、市民がイノベーションを成し遂げる場所—ランドリー説を論じる。

(財)自転車駐車場整備センター 専務理事  
(元都市研究センター 研究理事)  
鈴木 敦

創造都市 (creative city) とは、なにか？ Landry, Charles<sup>1</sup> (2000) *The Creative City: A Toolkit for Urban Innovators*<sup>2</sup>, London: COMEDIA. は、人々がイノベーションを成し遂げる場所であって、かつ、イノベーションの産物が創造都市であると示唆する<sup>3</sup>。ランドリーの論述は自由自在で、学術書の定型に収まらない。「課題の特定→用語の定義→理論的枠組みの提示→事例の紹介及び分析→統計及び数値データの分析→結論→将来の展望」という線形に進まない。したがって、同書における創造都市の定義といっても、そのままの文言が記されている訳ではない。同書から読み取れるという意味である。

総体に、同書の構成と文体は、線形の思考を否定するランドリーの主張と議論の対象である都市の在り方に、忠実に呼応していると言えよう。筆者は、『国際創造都市フォーラム 2007 in OSAKA』(2007年10月24日(水)から27日(土)まで大阪市で開催。)に

<sup>1</sup> チャールズ・ランドリー (1948-) は、シンクタンク COMEDIA の主宰者・代表。英独伊で暮らした経験を生かし、創造都市を提唱。

<sup>2</sup> 邦訳は、後藤和子訳『創造的都市—都市再生のための道具箱』(2003、日本評論社)。ただし、本稿は、原書に拠る。訳語(文)は、筆者の試訳である。

<sup>3</sup> 筆者は、「創造都市の展開—世界創造都市フォーラム 2007 in OSAKA を中心に」を *Urban Study* 第 47 号 (2007 年 11 月) に、「書評:リチャード・フロリダ著、井口典夫訳『クリエイティブ都市論—創造性は居心地のよい場所を求める』」を *Urban Study* 第 49 号 (2009 年 8 月) に発表した。したがって、本稿は、創造都市に係る論考の 3 本目に当たる。

参加したランドリーの風貌と悠揚迫らぬ話しぶりを思い出す。



『国際創造都市フォーラム 2007inOSAKA』におけるランドリー・COMEDIA 代表  
写真提供: 大阪市立大学大学院創造都市研究科 都市研究プラザ

### 1. 議論の及ぶ範囲

Landry (2000) の議論は、多くの事例を踏まえてなされる。英国、ドイツ、フランス、イタリア、ポルトガル、オランダ、デンマーク、フィンランド、オーストリア、ハンガリー、アイルランド等ヨーロッパ諸国の事例が多いが、日本(視覚障害者誘導用ブロックは、我が国に始まり、欧米諸国に広まった。)、米国、メキシコ、インド、フィリピン、中国(香港)、ブラジル及びエチオピアの事例も取り上げる。

通常的事例研究は、事例を紹介し、分析し、他の事例と比較対照し、法則、教訓等を導く。ランドリーの事例の扱いは、創造都市をつくる仕方に関する議論を進める際に、事例を引用・紹介し、一通り議論が終わった後、まとめて事例を紹介し、更に、議論を続

けるというものである。たしかに、この方式の場合、事例と議論がよくなじみ、ほとんどシームレスに感じられる。事例も、議論も、読者に受け入れられやすくなる。

## 2. イノベーション(innovations)

Landry(2000)が説くイノベーションは、殊更、マネジメント理論、経済学等で用いるイノベーションと異ならない。産物(end product)をはじめ、その産物の流過程、生産方法、生産システムのマネジメントに関する考え方等すべてのプロセスにおける新たなよりよいやり方、ノウハウ等を発明・発見し、実践することを指す。

ただし、「都市のイノベーション(urban innovations)」という用法が聞き慣れないのは、事実である。ランドリーによれば、都市の再活性化(urban re-vitalization)又は都市の再生(urban regeneration)は、成し得ないのであるから、創造都市においては、これらは同値である。違いは、他の論者がイノベーション抜きに都市再活性化又は都市再生を説く時に生じる。ランドリーは、そうした事態を念頭に置き、都市イノベーションを強調しているものと考えられる。

なお、ランドリーは、イノベーションに当たり、都市の記憶(urban memory)を失わないよう注意しなければいけないと言う。シンガポールは、イノベーションに成功したが、その記憶である中華街を失ってしまった。テーマパークにつくられた中華街は、映画セットと同じで、記憶ではない、とランドリーは、繰り返し警告する。

それでは、なぜ、記憶は大切か？筆者が考えるに、記憶こそがアイデンティティー(自分が何者であるかの認識)だからである。人

は、アイデンティティーが確立されていないと、自信を持ってない。自信がないと、新しいものを創造できない。逆に、アイデンティティーが強く、自信が持てれば、リスクに思える試みができ、結果として、より創造的になれる。都市も同じ。

都市の記憶と聞くと、どうしても、東京を想わざるを得ない。東京は、たび重なるイノベーションに成功し、国際的な富の創造の中心の1つになった。しかし、都市の記憶のほとんどを失った。例えば、旧町名。由緒ある、床しい町名(例 黒門町)がなくなった。

先日、筆者は、偶々、TV番組で、千代田城(江戸城)の歴史といまに残る外堀、見附跡等を知った。レポーターは、いま、千代田城の一部が皇居として残っていることがいかに貴重か、いかに東京の価値を高めているかと述べた。ランドリーの「都市の記憶」に照らし、このコメントは、実に、的を射ている。皇居があることにより、東京は、かろうじて、「都市の記憶」を保持している、と言って過言でない。

ただし、都市の記憶の総量と質において、西欧諸国の由緒ある都市に劣ることも否めない。例えば、ロンドンには、個別の旧跡を挙げるまでもないだろうが、中世の記憶がたっぷり残る。それと対蹠的に、北京は、繁栄の中で都市の記憶(例 胡同)を消そうとしている最中。

## 3. パラダイム・シフト(paradigm shift)

パラダイム・シフトも科学哲学における用法と異ならない。ただし、ランドリーのいうパラダイム・シフトは、物理学、生物学、経済学等で起きるものではなく、都市の在り方について起きる。新たな厳しい現実と直面し、課

題の解決を迫られた都市が、自己イメージを変革(例えば、汚染された工業都市から環境に配慮した緑豊かな ICT 企業の集積地へ)し、再生することを指す。そのプロセスは、経済的困難、社会的荒廃等の中であって、市民が自ら発見するものなければならないとランドリーは考える。もちろん、ランドリー自身のような、その都市にとっての外部の助けは必要であるが、イノベーションを考案し、イノベーションのための組織を設立し、イノベーションを断固実行するのは、市民である。変わろうとするプロセスにおいて、市民は、自らのマインドセット(習性となった考え方・思考態度。詳しくは、後述)に気付き、マインドセットを脱し、その都市の内外に存する資源を発見し、その資源を活用する方策を立案し、経済的・政治的・社会的・専門職業的な阻害要因を克服し、イノベーションの仕方を学ぶ。科学のパラダイム・シフトに多くの困難(例 ガリレオの地動説に対するカトリック教会の迫害)と発見の喜び(例 ニュートンのりんごの逸話)があるように、都市のパラダイム・シフトにも、難しければ、難しいほど成功に伴う満足がある訳だ。

#### 4. 産業都市の衰退

先進諸国においては、20 世紀後半から産業都市(工業都市)の衰退が始まった。産業都市は、製造業(工業)によって多くの人口を養い、繁栄してきた。しかし、工場が、先進国を離れ、より賃金の安い発展途上国に立地するようになり、人口減少と都市の荒廃が起きた。市場経済と自由貿易の下では、それは避け難いものにみえた。20 世紀の終わり頃から急速に進行したグローバリゼーションは、この変化を増幅した。

#### 5. 知識社会(knowledge society)

知識社会は、脱工業化社会(post-industrial society)である。それ以前の産業社会においては、資本、労働、土地等が最も重要な生産要素であった。一方、知識社会では、経済的価値の創造において、人々の知識が決定的に重要である。

平成 3(1991)年、女優宮沢りえの写真集 **Santa Fe** が発売され、大きな話題を呼ぶとともに、ベストセラーになった。その際、製紙会社のトップが新聞に寄稿し、同写真集に用いた特殊紙の研究開発と製造がいかにも難しく、多くの費用を要したか、それにも関わらず、利幅が薄かった、出版社と女優が大きな利益を手にしたのに、と嘆かれた。しかし、よく考えれば、紙は、コンテンツ(この場合、人気女優の希少価値が高く、かつ、「芸術的」とみなされる画像)の伝達手段(vehicle)に止まる。コンテンツを作製するにも高い費用がかかっており、なによりも、それまで世になかったコンテンツを創造したことの報酬が大きい。ランドリーは、知性(intelligence)には、これまで学校制度及び組織内で専ら尊重されてきた認知的・言語的知性の他、空間的知性、音楽的知性、身体・力動的知性、人格的知性、心理的知性及び個人間知性があるという。(Landry (2000) p.63) 知識は、知性の産物である。同写真集には、上記の非認知的・非言語的知性が総動員され、知識が投入されたといつてよい。知識のみが大きな価値を生む知識社会では、コンテンツの価値が大きい。我が国は、既に、知識社会である。したがって、同写真集の作製に関わった者の報酬も、知識社会のルールに応じる訳だ。

こうした事態は、既に到来しているのだが、マインドセットのため、見え難くなることもある。ランドリーは、かつて、産業社会の主役であった人々ほどこうしたマインドセットを持ちやすいと考える。その人達にとっては、いまの世の中は理解し難い、「不合理な」世界である。ランドリーは、新しい思考(New Thinking)の必要性を説く。

## 6. グローバリゼーション

4.で触れたとおり、グローバリゼーションは、個人の好悪を超えた現実である。ランドリーもグローバリゼーションの淵源とメカニズムを論じることなく、ましてや、グローバリゼーションの当否を問わず、受け入れるべき現実として議論を進める。ランドリーは、税制、規制その他個別の都市経営者が変えようのない要素を挙げる。民主主義国では、国内の諸制度は、原理的には議会で法律を制定すれば変えられる。しかし、実際には、国家という巨大な集団の意思決定は、国民の各グループの利害が対立するため、なかなか実行できない。況や、都市経営者が世界経済のトレンドに抗することはできない。たぶん、ランドリーは、暗黙のうちに、それを示したのである。

## 7. 社会的統合(social integration)

産業都市の衰退、知識社会の進行及びグローバリゼーションは、それぞれ、又は、複合して、社会的統合を弱める。個人(又は家計)は、都市の他の個人(又は家計)と価値を共有できなくなるとともに、格差が拡大し、コミュニティーが機能し難くなる。個人(又は家計)がばらばらな状態になる。貧困層等の疎外(exclusion)が生じる。

かつて、産業都市では、成人男性の相当部分が1つ又は複数の大工場で働いていた。工場の同僚たちは、多くの場合に価値、趣味(例 同じ工場の従業員がつくるブラス・バンド)等を共有し、格差も少なかった。工場労働者とその家族が核となり、産業都市にはまとまりがあった。しかし、国際競争力を失った工場が閉鎖されると、失業が発生する。失業者のうち、適応力に恵まれた人々は、雇用を求めて、他の都市へ移動する。そうでない人々が残る。人口は減少し、かつ、経済的余裕のない人々はコミュニティー活動ができず、コミュニティーは、衰退する。犯罪が増加し、税収の減少に伴い学校、公民館等は閉鎖・統合され、インフラストラクチャの維持修繕は難しくなり、生活環境は、より一層悪化する。悪循環が続く。こうした、一見どうにもなりそうもない状況にあって、ランドリーは、新しい思考を身につけ、自ら解決策(solution)を見出し、良い方向への動き(dynamics)を引き起こせと説く。豊富な経験と考え抜かれた理論があつてこそ、であろう。

一方、知識社会化は、1つの都市を2つの世界に分断してしまうことがある。産業社会の成員は、衰退に伴う困難の中を生きている。知識社会の主役である知識ワーカー(knowledge workers)は、高い所得、やりがいのある仕事と都市的アメニティを享受している。同じ都市に住みつつ、両者が交流することは稀で、互いに共感を持ち難くなる。

グローバリゼーションは、先進諸国における産業都市の没落を早める。また、グローバリゼーションは、先進諸国と発展途上国双方に都市の分断をもたらす。

## 8. 土地の気風 (*genius loci*<sup>4</sup>)

こうして、社会的統合が弱まりつつある時、市民の気持ちをその都市に繋ぎ止める「錨」(ランドリーが用いる比喩)となり得るのは、いわゆる「土地の気風」と文化である、とランドリーは言う。先ず、土地の気風。筆者が考えるに、土地の気風は、市民に共通するからこそ、土地の気風と呼ばれる。すなわち、所得階層、職業、教育等の違いに関わらず、市民が有する心性こそ、土地の気風であろう。

ランドリーは、「土地の気風」を定義せず、敷衍もしないので、上記のように推測した。仮に、それが正しいとして、その意義の「土地の気風」は、存在するのか? 「英国は、階級社会と言われる。英国人は、階級によって言語風俗を異にし、価値観も異なる。ある都市についても、同じ。階級の異なる市民が『土地の気風』を共有することはない」のではないか? いずれの見方が正しいか、証拠がなく、決め難い。

ただし、一般に、階級差が少ないと認められている我が国社会では、いわゆる県民性がありそうだ。

我が国には、律令国家60余州(国)と江戸期300諸藩の地域性が残っているとされる。例えば、浜松市をはじめとする静岡県西部(遠江国)の人々(遠州人)は、「やらまいか」の気風を有し、たとえ困難でも新しいことに挑戦するとされる。

また、北陸地方における浄土真宗のような宗教の県民性への

影響も指摘されている。

更に、城下町、「商都」、漁村等産業構造による気質の違いが広く認識されている。

フロリダ教授の「都市の性格」仮説と県民性の違いは、仮に、県民性の大半が江戸期に形成されたのであれば、あまり大きくない。

そうであれば、開放性仮説を我が国にあてはめていけないことはない。

出典:鈴木敦「書評:リチャード・フロリダ著、井口典夫訳『クリエイティブ都市論—創造性は居心地のよい場所を求める』」(Urban Study 第49号(2009年8月)所収)

都市についても、例えば、大阪市民と京都市民の気風の違いが話題になるくらいであるから、存在するかもしれない。

## 9. 伝統を受け継ぐ文化

次に、ランドリーがその統合効果を重んじる文化(culture)は、ハイ・カルチャーから祭り、宗教まで含む。そもそも、文化は、地域、宗教、職業、年齢層その他を同じくする人々が共有するプロトコル(相互に決められた約束事の集合)と考えられる。特定の集団に所属すれば、文化が必要になる。要するに、「集団への所属→文化の共有」である。文化に人々を近づけ、親和させる力があるのは、当然である。ランドリーは、それ以上を期待していると考えられる。すなわち、都市へ

<sup>4</sup> 発音記号[lóusai]

の所属意識が薄くなってきたいま、上述の「集団への所属→文化の共有」を引っくり返し、「文化の共有→集団への所属」を図ろうとしている。

#### 10. ハイ・カルチャー (high culture. 高級な文化)

ハイ・カルチャーは、古典音楽、絵画、古典劇、バレエ等を指す。ハイ・カルチャーは、都市の社会的統合を強め、都市のイノベーション力を高め、21世紀の都市への道を拓くのに役立つ。我が国各地におけるベートーベンの交響曲第9番ニ短調作品125第4楽章「歓喜の歌」を専門にする合唱団の数の多さを見てもわかる。

#### 11. ロー・カルチャー (low culture. 高級でない文化)

Landry (2000) は、ロー・カルチャーに直接触れていない。筆者が考えるに、ロー・カルチャーの力がハイ・カルチャーに劣る訳ではない。参加者の数では、ロー・カルチャーがハイ・カルチャーを上回るから、むしろ、力は大きいかもしれない。例えば、平成18(2006)年に始まったB級グルメの祭典!B-1 グランプリ。名称のとおり、ロー・カルチャーのイベントであるが、マスメディアも取り上げる。そして、なによりも、参加するグループを中心にその都市のアイデンティティーを強め、その次のイノベーションにつながることを期待できる。

#### 12. 祭り (festivals)

Landry (2000) の事例は、新しい祭りが多い。創造都市に相応しいからか。例えば、ヘルシンキの Valon Voimat (光の力) 祭り。

従来から、ヘルシンキ市民は、暗い冬に耐えるため、窓辺、墓地をはじめいろいろな場所にたくさんのろうそくを灯し、ロウソク・パレードしていたが、最近、祭りとなったもの。

しかし、ランドリーが触れない、より伝統的な祭りの力も大きいはずだ。例えば、東北三大祭りを想像すれば、容易に理解できる。

#### 13. スポーツ大会

古代ギリシャ都市国家のオリンピック競技会を引き合いに出すまでもなく、現代のスポーツ大会も社会的統合を強め、都市のイノベーションのきっかけ (trigger. ランドリーの用語) になると考えられる。例えば、1964年東京で開催された第18回夏季オリンピック大会。新幹線の開通、首都高速道路の開通、幹線道路の整備等から公共的施設における絵文字の導入まで、東京オリンピックを契機にたくさんのイノベーションが成し遂げられた。今日の東京があるのは、東京オリンピックの賜物と言えよう。

#### 14. 宗教

宗教について、Landry (2000) は、文化と同様のトリガー効果を認めるが、その判断の理由は、全く敷衍されていない。筆者が考えるに、キリスト教のような伝統的宗教の場合、都市にアイデンティティーと ethos (特定の民族・社会・時代・文化等に固有の) 精神を与えるものの、イノベーションにつながる否か明らかではない。ランドリーは、完全に世俗的視点から創造都市を考えているので、宗教の不確定要素とみても不思議はない。

#### 15. ラブ・パレード (Love Parade)

文化の要素を考察する際、ベルリンをはじめ

めドイツ諸都市で開かれたラブ・パレードは、興味深い。「ドイツ人らしくない」と評された 21 世紀の祭りは、イノベーションにつながるトリガーであるとともに、それ自体イノベーションであった。我が国から発信されたテクノ・ミュージックで 100 万人を超える群衆が踊る。会場となる都市の広場には、近隣諸国から多数の若者がやってくる。1960 年代の巨大野外ロック・フェスティバルとも異なる。その悲劇的な終わりは、一体なにを意味するのか？

同イベントについては、若干長くなるが、Wikipedia から抜粋・引用する。

ラブパレード(LOVE PARADE)は、毎年 7 月にドイツ(当初はベルリン)で行われていた世界最大規模のレイヴ(引用者注 ダンス音楽を一晩中流す大規模な不定期音楽イベント)である。

ベルリン市内の 6 月 17 日通りを行き来する多数のフロート(サウンド・システムを積んだトレーラー)を中心に参加者が踊り、練り歩く。終盤には戦勝記念塔下に皆が集結し、ファイナルギャザリングでの DJ プレイでクライマックスを迎える。「パレード」の名の通り、本来は政治的デモ行動として行政当局にも開催を認められていた。・・・開始は 1989 年。当初は DJ である Dr.Motte により始められた 150 人程の小さなパレードであったが、毎年参加者が増え続け、ピークの 1999 年には国内外から最高の

150 万人を動員した。・・・ 2009 年の中止を経て、2010 年 7 月 24 日、デュイスブルクの旧貨物駅用地でラブパレードが開催された。しかし、現地時間 17:00 頃、入場口とされていたトンネル出口にあるランプ(斜面)に人があふれて倒れる人も生じ、圧迫によって 21 人が死亡、500 人以上の負傷者を出すという惨劇が発生した。・・・この惨事を受け、ラブパレードの永続的な中止が主催者から発表された。

## 16. ホーリスティック思考 (holistic thinking)

「全体論的思考」と訳される。一般に、科学においては、事物の認識に際して、事物を単純な要素に還元し、その後、それを総合する。これが、還元論的思考である。一方、全体論的思考は、複雑な全体を、そのまま認識しようとする。ランドリーは、新しい思考は、ホーリスティックでなければいけないと繰り返し述べる。例えば、都市環境を言語中心に把握するだけではいけない。その都市の音環境、建造物、広告物等の美醜、街の雰囲気、居住者、勤務者、歩行者等への心理的影響、歩行の快適性等をすべて感じ、見聞きしなければいけない。ハリウッド製アクション映画の主人公の台詞と同じく、ランドリーは、読者に都市を感じ取ることを求める。

たしかに、ホーリスティック思考を理解するのは難しいが、実は、我々も日常生活において、常に、ものごとを認知的・言語的にとらえている訳ではない。一瞥した把握したり、気配を聞くだけのこともある。仮に、個人に最大限 10 の視聴覚・言語知性が備わっていると、そのうち認知・言語的知性の割合が 5 であったとする。上記の一瞥／気配は、

5に達せず、2又は3程度か。一方、ランドレは、最大限の10まで諸知性を使えと求める。大きなエネルギーを必要とする作業である。難しいからこそ、都市の文化と都市の記憶に裏打ちされた、確固たるアイデンティティーがなければいけない。

## 17. 非線形

ホーリスティック思考と同時に Landry (2000)で強調されるのは、線形思考の排除である。因果関係を単純化し、究極的には、1次方程式で表現できるとみなすのが、いま主流の考え方である。プロの経済学者が線形を選好するのは、経済学者自身が認めるとおり、線形の方が取扱いやすく、きれいな答えが出るからだ、と言われる。しばしば用いられる例え話は、次のようなものである。

夜、ある男が街灯の脚下でなにか探している。

通りがかりの別の男が、「なにを探されていますか？ そのあたりで落としましたのですか？」と尋ねると、男は、「ここで落とす訳ではありません。ここが明るかったの。」と答えた。

ランドリーは、選挙の世論調査の第1ステップとして、簡単に測定できるデータのみを基に推計するのは構わない。問題は、第2ステップで、簡単に測定できないデータを無視し、第3ステップで、簡単に測定できないデータは重要ではない、と主張することだと

考える。(Landry (2000) p.71) 要するに、「街灯脚下だけではいけない」と言う。

線形思考を止めたら、すっきりした、きれいな答えは、諦めなければいけない。それでも、現実世界の真の姿を知る方が大事であろう。

なお、都市が気象、経済等と同じく複雑系であることは間違いない。各要素と結果の関係が一義的に定まらず、要素間の影響関係が結果を左右するのが複雑系。

## 18. 文体

Landry (2000)の文体は、1.において、構成について述べたのと同じく、学術書の書き方に係るガイドラインに則っていない。いずれが読みやすいかは、決め難い。学術書であっても、文章が平明で、論旨が明快なものはある。いずれにしても、同書が文体には、流露感がある。

その文体は、先ず、過度に厳密ではない。脚注は、付けられていない。Interesting Websites リストが付いているのは、楽しい。

第2に、過度に客観的ではない。学術書、論文等には、あまり“T”を使わないよう習ったが、ランドリーは、かなり“T”を用いる。その結果、客観的な印象はやや落ちるが、臨場感が生じている。

## 19. 学際的思考 (interdisciplinary approach thinking)

学際的接近も強く推奨されている。それぞれの学問分野は、物事の異なる見方を有している。学際的学者・著述家であった小室直樹は、学問を習うことは、その学問の「色眼鏡」でもって物事を見ること、と断じた。例



えば、経済学は、合理的個人が効用を最大化する行動を取ると仮定する。仮定ではあるが、ほとんど信念に近くなっている。したがって、この色眼鏡をかけると、以前よりはっきり見えるが、見落としてしまう事象もある。

ランドリーも学問それぞれの指向性がわかっている。見落とさないためには、できる限り多くの学問分野の理論を適用する必要がある。それが、学際的思考の勧めの理由だと考える。

## 20. 多学問的思考 (multi-disciplinary thinking)

学際的思考と多学問的思考は、同じ文に對の形で現れる(p.55)。したがって、両者には、相違があるはずだ。しかし、そうした説明はなく、手がかりもない。いまは、それ以上分析しないこととする。2つの思考はともに、創造都市の課題に、少なくとも、哲学、心理学、文化人類学、社会学、政治学、経済学及び都市工学を適用している。それぞれの章節にどの学問を応用しているかは、その章節に引用されている文献を分析すれば、知れると見込まれる。当該文献の書誌情報は、付録の文献リストでわかる。ランドリーのプロフィールを調べれば、一般に認められている専門分野(学問分野)が判明する。その上で、特定の章節に戻れば、どの学問分野か明らかになる。

## 21. 理論化≠線形の関数

ランドレーが同書で行った、実践結果の理論化は、線形ではなかったもので、方程式はない。また、文章による簡潔な定式化も登場しない。ホーリスティックな方法論に立つので、致し方ない。そこで、本稿冒頭で、最

も単純な定式化を試みた。それに続き、一連のキーワードを論じた。本稿を結ぶに当たり、より一層進んだ定式化を試みたい。

創造都市とは、市民が、市民及び専門家のマインドセットをはじめ経済的・心理的・政治的な阻害要因を克服し、新しい思考に立ち、ホーリスティックな方法及び多くの学問の成果を、産業社会から知識社会への転換に伴う諸課題に適用し、解決策を考えだし、イノベーションを成し遂げる場所であって、かつ、イノベーションの産物である。

市民及び専門家は、文化が社会的統合を強め、都市のアイデンティティを強化し、文化によるイノベーションを可能にし、強いアイデンティティは、困難が続くイノベーションのプロセスにおいて、市民を精神的に支えることを認識し、文化を重視する。

一見、住宅、事務所ビル、商業施設、生産設備、公共施設等の計画から出発すればよいように思える。しかし、市民が都市への所属意識を持ち、いままでになかったものを作り出すことを目指し、イノベーションのプロセスで学習しつつ、ねばり強くイノベーションのプロセスを続けなければ、都市再生は成し遂げられない。そのためには、市民の連帯した強い精神(ethos)が不可

欠。

受け継がれてきた都市の気風も市民を都市に繋ぎ止める。都市の記憶を失わないようにすれば、気風と文化がイノベーションへのトリガーとなる。

イノベーションは、従来、見過ごしてきた隠れた地元の資源を発見し、それらを活用して行う。資源は、廃止された産業施設、文化、自然等のこともあるし、極寒のことさえある。資源は、必ずある。イノベーションによる都市再生は必ずできると信じ、努力する。

## 22. 都市イノヴェーターのための道具箱 (toolkit for urban innovators)

Landry (2000) 中、都市イノヴェーターのための道具箱の部分については、機会があれば、別途論じたい。

## 23. 『国際創造都市フォーラム 2007 in OSAKA』におけるランドリーのプレゼンテーション要旨

4年前のランドリーのプレゼンテーションは、創造都市に関する定式化を含むので、ここに再掲する。

- 創造都市は、強いアーツの伝統 (a strong arts fabric) を有する。
- 創造都市は、創造的な経済と同義である。
- 創造都市は、大きな創造的階層 (芸術家、知識ワーカー、科学者) を有する。
- 創造都市は、「市民誰もが潜在的に創造的である」と認める文化を有する。
- 歴史と創造性は、偉大な相棒同士である。
- 創造においては、ホーリスティック思考が大事。
- 創造的な人間関係は、各プレイヤーが対等なジャズのジャム・セッションである。指揮者がすべての決定を下す交響曲ではない。
- Be best, not in, for the world.